

戊辰戦争と秋月悌次郎

中西達治

はじめに

本稿は、鳥羽伏見戦争前後の会津藩の動きの中で、秋月悌次郎がどのような事態に関わっていたかを追求し、その後の会津藩が和平交渉を続ける一方で、戦争態勢確立して奥州列藩同盟の成立により全面戦争に突入した中での、秋月悌次郎の姿を具体的に描き出すことを目的とする。

一

慶応四年一月一日、大坂城にいた徳川慶喜は上洛の命令を受け、旧幕府軍及び会津、桑名両藩に先発を命じた。京都に向かうということに対して、兵士たちは戦争になるという認識は持っていなかったという。白井五郎大夫の大砲隊に所属していた藤沢正啓は、

何でも此時、私共仲間の下馬評では、先づ京都に入つたらば大仏の土州邸に、落ち着き、土州と力を黜せて薩摩を討つのであるといふ事でした。『藤沢正啓談話筆記』

といっていて、そのあたりの事情が分かる。土佐藩邸に入って、そこで土佐藩と一緒に薩摩藩討伐をするという発想は、如何に幕府側の勢力が状況認識に疎いかを如実に示しているが、慶喜が、守備兵を率いて出発してきたことは、薩摩藩にとっては願ってもないことだったのだ。

一月二日大坂を出発した会津藩兵と旧幕府軍は淀に到着、翌三日淀

を出発して京都を目指した。上洛の途中鳥羽、伏見の街道を守備する薩摩藩、土佐藩の軍勢に行く手を阻まれた旧幕府軍は。大坂の本陣に伺いを立て、勅命で上洛するのだから遠慮するにはおよばないという答を受けて、守備兵と押し問答をしていたところ、午後四時頃突然竹田方面で発砲され、全面対決になった。三日から四日にかけて戦闘が継続される中、新政府の対応はすばやかだった。四日には仁和寺宮義彰親王が、征討大將軍に任命される。薩摩藩、土佐藩対旧幕府軍、会津藩などの諸侯の争いだったが、挑発行為を受けて発砲するのを待ち構えていたかのように、朝敵として討伐の対象とされたのである。

二

一月三、四日、不意を打たれて緒戦にやぶれた会津、桑名の旧幕府側將兵は、大坂で再起を図った。『会津戊辰戦史』によれば、一月五日慶喜は容保、定敬等幕府軍將帥に対して交戦を督励したという。慶喜の督励を受けて、会津藩の上田伝治は、加賀、紀州等の支援を求めようと言いつ出した。小野権之丞等が伝蔵の説に賛成したので、伝蔵は倉沢右兵衛に告げる。右兵衛はこれに賛成し広沢富次郎に告げよ、彼が賛成すれば共に藩相に告げようという。伝蔵は富次郎に告げ共に登城して藩相萱野権兵衛、上田学大輔に告げる。権兵衛は、危惧しつつも尽力せよと命じる。伝蔵は、富次郎及び秋月悌次郎と共に幕府目付安藤次郎左衛門に告げ、「臣子の分を尽さんと欲す。両三人数日の間

戦地を離ると雖も不可なからん。」といった。夕方安藤は、慶喜にも話した。ついでに誰がゆくのかと聞いたところ、誰もが横山に行けというので横山は、神保修理が戦場から戻ったので自分がそのあとにゆくことになっているといったのだが、とにかく出発した。だが彼が和歌山城に着いた時、慶喜は大坂城を出て行方不明だという注進が届いていたという。戦地から戻った修理が、慶喜に、大義を説いて交戦の非をとなえたという話が伝わっているのはちょうどこの時のことである。

慶喜には朝廷に敵対する気はもともと無かった。彼は大政奉還時にすでに幕藩体制に見切りをつけていた。新しい国の形についての彼の判断があったからこそ彼は大政奉還に踏み切ったのだ。彼の意図が小御所会議で全く受け入れられなかったからといって、旧来の政治に戻すということはあり得ない。今回の上洛も朝廷からの呼び出しに併せて江戸表における暴徒の責任を問うためになされたものであった。だからこそ、薩摩藩の挑発によって戦端が開かれたからといって、みすみす朝敵となって内戦を継続するつもりはなかったのである。ここで慶喜は、最終的に不戦の決意をしたのだろう、六日深夜急遽交戦意欲の旺盛な容保、定敬を道連れにして大坂城を離脱し天保山に向かった。一行は翌日開陽丸に乗船し八日の夜大坂湾を出て江戸に向かった。この点が、孝明天皇に親近して幕府を支えるという使命感から長州藩を敵視し続けた会津藩、桑名藩とは決定的に異なる。この時、新しい国の形を見据えて身を引いた慶喜に対して、会津藩は逆に宗家を守るという形で慶喜が見限った旧来の幕藩体制を守ると、藩論を統一していた。ここに会津藩の悲劇がある。大政奉還以後の政情に応じた対応策を考えるゆとりが会津藩にはなかったことになる。会津藩にも新しい国の形について考える人材がいなかったわけではない。大政奉還建白書の提出にあたって素案を見せられていた手代木勝

任などは内容に理解を示していたというし、この後薩摩藩に捕らえられた山本覚馬のように、新時代の政体を論じた人材もある。だがこうした知見は、この時顧みられることはなかった。

三

藩主がいなくなった会津、桑名両藩兵の驚きは察するにあまりがあるが、会津藩士は残された家老たちの采配で、和歌山港経由、あるいは陸路で、江戸に戻った。気の毒だったのは京都に出張してきていた桑名藩士達で、彼らは、国元で家老が在国中の前藩主の実子を立てて政府軍に恭順の意を表したため、国元に帰る事が出来ず、定敬を追って、江戸に向かった。

開陽丸は十一日、品川沖に到着した。翌日一行は上陸して江戸城に向かいその後容保は、和田倉門の藩邸に入った。その後続々と会津藩兵が江戸に戻ってくる。一月七日、新政府は徳川慶喜追討令を発したが、十五日になって新たに奥羽諸藩に対する徳川慶喜追討命令を出した。同じ日、江戸に神保修理の一行が到着している。同行した浅羽忠之助がこの時御宸翰を大坂城から持参したということはよく知られている。

大政奉還前後から鳥羽伏見の戦いの頃まで悌次郎はどのような動きをしていたのか。大政奉還直前の前年九月二十八日の中川宮日記には、二条撰政と中川宮との連絡役として悌次郎の名前があがっているし、十一月二十六日には、在京の会津藩士が、水戸・岡山・島原・盛岡・浜田・仙台の各藩士と会合を持った際、会津藩の出席者の一人として名前があがっており、公用局の一員として地道な活動をしている様子うかがわれる。先に見た紀州藩との連携を探るといふ考え方は、神保がとなえた対応策とは明らかに異なっている。彼はこの時會津藩の定めた徹底抗戦という立場で事態に対処しようとしているのだ。この後秋月が、海路か陸路かどのようにして江戸に戻ったのか、詳細は分か

らない。秋月次三氏編の「秋月悌次郎経歴」によれば、この時期については、「戊辰正月、藩公に従って江戸に帰り、次いで会津に帰る。」とあるのみで、丸山系図「秋月悌次郎」の項に「二月、江戸において持席御聞番の勤め仰せ付けられ候事。」とあることから、江戸に戻ったからは、文字通り容保の側近として、活動を始めたことがわかる。南摩綱紀の起草した悌次郎の墓碑銘に「藩公従前大將軍東帰。子錫亦帰江戸。公托謝罪表於諸藩。上之朝廷。子錫專与其事。而書不達。」とあることに注目しながら、江戸の藩邸に再結集して以後の容保と藩士の動きを見て行きたい。

四

一月十七日明け方、前日登城した江戸城から藩邸に戻った容保は、西郷勇左衛門、一瀬要人を呼び出して、次のように語った。

上様御沙汰、此度京都戦二付てハ、何ニも御恭順之道ヲ被為尽、御退穩之上、朝敵之名被為負候を御申開被遊候得とも、御永統之道も無之、如斯兵備も不整ニ及再戦候てハ、乍大坂之覆轍を踏段、徳川之血統断絶、祖先之祭も此迄ニ相成、無詮義…。

前將軍様は今回の京都の合戦でとにかく恭順とのことで、退隱の上で朝敵という汚名を付けられないように申し開きなされた。しかしそれが長続きする保証はなく、備えが不十分なままで再び戦になったら大坂の二の舞で、徳川家が滅び祖先の慰霊も出来なくなる。まことに詮ない次第である云々。

この件については、

右二付てハ、宰相様御進退至々極御大切成義、最初君側之奸悪御掃攘之儀御奏聞之上、御取計被成候儀を、御再拏無之と申ハ、麾下並諸藩瓦解土崩割拠ニ相至候間、何ニも大旗不被進候てハ、御奏聞え御反体ニ相成、犇ト不相成義、此上ハ衆議を擬、千載不恥所え御立居り御所置被遊候外無之義、万々一も此節御動き被遊候てハ、朝敵之汚名被為負候順ニ至間敷ものニも無之、依てハ何れ

之処迄も、公辺之御趣意御遵奉、反逆之汚名御取消不被成候てハ不相成義ニ候、断然御決心一步も御引不被遊、夫々御所置被為在候様…。

この件については、容保公の進退が最重要課題で、最初に君側の奸を一掃して上奏の上対応されるべきだが、再拏はしないという事だと、譜代の旗下、諸大名という体制が瓦解しバラバラになってしまうから、統一の大旗を掲げないまま奏聞に反対されることはあつてはならないことだ。こうなつたからには、衆議をまとめ、辱めを受けない立場で行動する以外にない。万が一へたに動いて朝敵の汚名を受けるやもしれず、ここはとにかく前將軍の意向を遵奉しながら反逆者という汚名を取り消さなければならぬ、その覚悟で一步も引かず処置されるように…。

と容保に進言したという。(報告が、国元に寄せられた。)(『稽徴録』) 浅羽忠之助の『鳥羽へ御使並大坂引揚の一件』によれば、この日松平容保は、三田藩邸に鳥羽伏見の戦いの負傷者を見舞い、傷病者を慰勞した。

伏見鳥羽戦争手負の者共着致し、芝御屋敷奥御殿は病院に相成り候。右為御見舞、十七日御乗切にて御出遊ばされ候処、小森一貫斎、右懸り仰せ付けられ居り御案内申上候処、一々御懇に御尋ね下され、中には疵所に寄り見兼ねぐらいの者共多分これあり候処、逐一御覧の上、御親切に御勞り下され候につき、皆々落涙にて御礼申上げ、其余御長屋の親類、寄辺之者へ罷り越し居り候者これあるにつき、俄かに其所迄入らせられ、病床にて夫々御懇の御尋ねこれあり。皆々有難く存じ奉り候。

鳥羽伏見の戦いの負傷者が帰ってきたので、芝藩邸の奥御殿は病院になった。十七日に容保が訪れ、小森一貫斎の案内で病室をまわった。中には目も当てられないような負傷者も沢山いたが、容保は一々親切にねぎらいの言葉をかけた。中には親類縁者の元に身を寄せていたも

のがあり、容保はそこまで出掛けて病床で声をかけたので、一同は感涙に咽んだ。この件について『結草録』では十八日のこととしている。

十八日、公、傷者ヲ慰問、小森一貫齋側ニ侍リ、四日、五日ノ戦状ヲ問ヒ玉フニヨリ、悉ク其形情ヲ対ヘ奉ル。感涙數行ス。

日にはどちらとも確定出来ないが、『会津藩戊辰戦争日誌』（菊池明編）は、十七日としている。いずれにしても容保の家臣団に対する思いの深さがよく伝わってくるエピソードである。この日喜徳の派遣した会津藩士が国元から江戸に到着した。神保修理等大坂から江戸に帰着した藩士から情報を得るためである。

五

これより先、一月十日、朝廷は徳川慶喜、松平容保、松平定敬等旧幕府関係者の官位を剥奪し、邸地を没収した。その後十七日、新政府は仙台藩主伊達義邦に会津藩討伐を命じた。

薩長など、京都でクーデターにより政権を奪い取った西国諸藩の勢力は、まだ江戸にまでおよんでいなかった。朝廷が出した徳川慶喜、会津藩の征討命令が、一方的に仙台藩はじめ奥州諸藩に送りつけられる中、慶喜の自主規制により旧幕府からの働きかけがなく情報不足に悩んでいた関東、東北地方の諸藩に対して、会津藩は積極的に働きかけている。一月十八日には、会津ははじめ諸藩重役が、小石川の水戸藩邸に参集した。会議のあと水戸藩邸から以下のような内容の文書が諸藩に送られており、何のための会合だったかが分かる。

去ル八日、於京都、被仰出候勅書之義、全薩長之賊臣矯聖旨、内府君を以大逆無道之地ニ陥リ候次第ニ而、朝敵之御所行被為在候義は、判然無之事ニ御座候。然ルニ御譜代列藩より麾下之士と雖方向ニ迷ひ、恭順仕、罪杯（ママ）之説相立、視聽之惑乱せしめ候族も有之哉ニ相問候所、今日ニ至候（ママ）御伏罪被遊候而、薩長ニ被為対事ニ陥リ無（ママ）、無詮御所行ニ相成、殊ニ戦不

利して後ニ仰立候儀、決而被為在問敷御儀と奉存候。

畢竟輩下を御辭被遊候より、奸臣共之壅蔽甚敷、今日之御場合ニ成来候事ニ候得ば、速ニ兵ヲ募、征討之宮へ右之御主意柄御建白之上、御採用無之候得ば、不被得止君側之悪御掃鋤、壅蔽御開御成功之上、御伏罪之義被仰立候共、遲義ニは無之、御名分燦然相立候事と被存候。乍併矢石之間、征討之宮を奉犯候事も可有之候得共不得止次第、神祖之御盛業御恢復ニも可相成上、皇国一致、海外諸国ニ卓絶之御廟算も可相立、方今士林之大節ニ於而は余事有之間敷存候得共、猶又博く公儀を届候上、御尽力被成度との義ニ付、及御相談候。

八日に出された勅書は、薩長の賊臣が天皇の意向をねじ曲げ慶喜公を大逆無道と決め付けているが、朝敵になるような行為は全くなさっていないことは、はっきりしている。ところが普代の大名や旗本たちはどうしたらよいか分からないまま、恭順とか、罪を犯したとか言いふらす者がいる。服罪されていて薩長に敵対することもなくて、どうしようもなく不利になってから抗戦しようということになったのは、あつてはならないことだ。

これは大政奉還後謹慎している間に奸臣がはびこつてこのような事態を招いたのだから、早急に軍備を整え征討宮に建白書を差し出し、採用されなければ君側の悪を排除して正路をはっきりさせた上で、伏罪すれば名分は立つ。早急に決断しなければならぬため時には征討宮に害がおよぶかもしれないがそれはしかたがない。家康公以来の威名の回復にもなり「皇国一致」という世界に稀な政治体制が出来る。現在はこれしか無いと思われるが、さらに広く趣旨を徹底し尽力したいということと相談におよんだ。

文中「皇国一致」ということばがあることで分かるように、国を皇国と捉える彼らの発想は、薩長の天皇を取り込んだ政治と共通している。内乱に勝つのは天皇を押さえた側であり、外国の勢力の力を借りて天皇に刃向かうという発想はここでは成り立たないのである。会津

藩から誰が出席していたのかは分からないが、この会合の趣旨は徳川慶喜の汚名をそぐために行動を起こすということだった。これはかつて会津藩が長州藩を排除した時の反対勢力の言い分と同じである。

この問題の当事者である慶喜はどうしていたか。『結草録』には、慶喜が一月二十日、三田の会津藩邸に赴き負傷者を見舞ったという記録がある。『藤岡屋日記』は、二十一日とするが、『鳥羽へ御使並大坂引揚の一件』でも、慶喜の見舞いを二十日のこととしている。慶喜が病室に入ったところ、一人のけが人が慶喜に向かつて

私疵は仮令全快不仕候とも宜敷御座候へども、只恨らくハ、御立退無御座候ハ、薩長之敗走を一見、快死可仕処、却而拙藩敗走之姿ニ相成、是而已遺憾(憾)ニ奉存候

自分の傷は治らなくともいいが、退去という事がなければ薩長の敗走を見て、喜んで死ぬことが出来たのに、反って自分たちが逃げる格好になった、これだけが残念です。

と慶喜をなじった。これに対して慶喜は「もつともだ。」とだけつぶやいたという。〔藤岡屋日記〕

『鳥羽へ御使並大坂引揚の一件』によればこの男は高津忠三郎で、高津溜川の子である。この時彼は「幕兵の拙さ」ことをはじめ思う存分話した。外の者も見舞いをされても誰もありがたがるものなどなく、陰で口々に悪口を言っていたという。

(彼はこの後傷が癒えると和田倉門の上屋敷に出掛けて鳥羽伏見合戦の様子を報告し、さらに慶喜は腰抜けであてにならない、「早く御国へ御下向にて五千の兵を御募り遊ばされ、四境を御固め遊ばされ候外これなき」と、言い放ったという。彼は明治九年永岡久茂らと千葉県庁襲撃を計画した思案橋事件の首謀者の一人である。)

六

この頃から会津藩の他藩への働きかけが活発化する。二十日会津藩

士と長岡藩士が、新発田藩に酒屋陣屋での会合への出席を求める書簡が作られている。(以後さまざま呼びかけの結果、この会議は二月二日から八日間にわたって会津藩領の酒屋陣屋(越後)で開催された。)翌二十一日には、諸藩邸に長州、薩摩両藩の非を訴える使者が派遣されている。

対外的にいろいろ働きかける一方で、容保は、二十一日、家老に対して次のように述べて、家督を喜徳に譲ると通達した。

当月六日の夜中、大坂表騒擾之折、不図も上様還御、御独行位之御儀ニ付、御先途奉見届度心ならずも御供致候儀ニ候所、其節之場合いかんともするなきの形勢ニ在之、皆共へ申聞候暇も無之、大勢之家来共残置候段、君臣之義理不立、面目を失候儀、責て之申訳ニ御家督若狭守ニ譲、討死、手負之族を夫々勞り遣度存候。然といへとも若狭守を助、必勝之策を擬シ、是非とも無二之戦ニ及、徳川御氏挽回之業不立候てハ、死とも瞑目難致事候条、予カ過失を打捨、同心戮力、姦賊平定之功を奏、死凶之者之靈魂を弔呉候様頼入候也。

慶応三(四)年正月廿一日

宰相

家老中

(『稽徴録』)

今月六日の夜中大坂でゴタゴタが起こった時、突然前將軍が単独退去ということになり、経過を見届けるため同行した結果、家臣団へ説明する間もなく、大勢の家臣を残したまま退去したことは君臣の義理を欠き面目ない。申し訳のために家督を喜徳に譲り、自分は戦死者、負傷者いたわりたい。ついでには喜徳を助けて必勝の戦いをして徳川家の名を回復しないでは、死んでも死にきれない。私の過失を乗り越え、協力一致して奸賊を平定して、死者の慰霊をしてほしい。

おおよそこのような意味だろうか。この時のことは、後年慶喜が、

なぜ容保、定敬の二人を同行させたのかと聞かれて、彼らをそのままにしておいたら戦争になるからと答えたという。慶喜との姿勢の差は明らかである。

この日の夜、萱野権兵衛・内藤介右衛門等が江戸に帰着すると容保は、彼らに会って直接言い訳をし慰勞して、別室で酒食を振る舞った。以後も藩士等が品川に到着すると直接使者を出し、軽輩に至るまで同じようにもてなしたという。（一月二十六日には、砲兵隊の帰還者を見舞っている。）

七
一月二十九日、会津藩が戦争の準備を進める中、徳川慶喜は稲葉正邦を通じて越後国蒲原、魚沼両郡の内の所領十二万三千石を会津藩預けとした。

二月に入ると事態は一層あわただしくなる。

二月三日、天皇親征の詔勅が出され、九日には有栖川宮熾仁親王を東征大総督とする人事が決まる。着々と朝廷は朝敵とした旧幕府関係藩の追討準備を整える。そんな京都の動きの中で、前月二十一日に家老に通達された容保の隠居、喜徳の家督相続は二月四日に執り行われ、翌五日には旧幕府がそれを認めている。会津藩では二月七日佐川官兵衛を中隊司令官とし、フランス式軍事訓練を開始した。この訓練は江戸城内でフランス人から指導を受けて行われていた。さらに国元では藩士、地方御家人農兵を組織して藩境の警備を厳重にした。江戸からは旧幕兵がおよそ二千名江戸を出発して会津に向かった。（後の衝鋒隊）

会津藩は戦闘態勢を整え、旧幕府内で主戦論を唱え続けたが、慶喜は一貫して恭順を説き、旧幕府の面々は抗戦、恭順に分かれて議論がまとまらなかった。そのため容保は帰国して藩をまとめることにした。この時、旧幕府が抗戦態勢を取ることを予想して国元からは二月九日、

喜徳が西郷頼母等と江戸に向かうため若松を出発したが、途中で容保が帰国すると聞き、福良で容保を待つことにした。

二月十日、旧幕府は徹底抗戦を主張していた容保、喜徳父子をはじめ、慶喜に異をとなえる幕臣のグループを登城禁止処分とした。

この頃会津藩では朝廷に対して歎願書を提出する準備をしており、各藩にそれを取り次いでもらうよう働きかけをした。十一日には輪王寺宮に容保の歎願書が届けられ、田中土佐、神保内蔵助等家老の歎願書が、江戸在府中の二十二諸侯に届けられている。先にも見たように二月に入ってから御聞番に任命されたという略歴の記述ならびに外交文書起草に預かったという南摩の墓碑銘によれば、ここに出てくる歎願書はおそらく悌次郎の手になるものとして間違いないだろう。

藤岡屋日記によれば、「会津侯歎願書」として諸侯に送られた歎願書は、容保のものの家老連署の二通がある。容保の署名があるもの是不肖之容保、謹而奉言上候。去ル戊年以来在京奉職仕候処、計らずも無限蒙天恩、冥加至極奉存候。然ル処宗家慶喜以下不束之次第二而、天怒ニ触れ、御親征被仰出候段、重々奉恐入候。京都之儀は、容保守護ニ有之、今日之形勢ニ立至候段、旁以何共可申上様無御座候。畢竟容保、上慶喜を輔翼して不能安震襟、下ハ頑固疎暴之家臣共制不行届之所存ニ御座候間、同家慶喜義は寛大之恩召を以、御取扱被成下度奉懇願候。容保義は、退隱之上、在所へ引退キ恭順謹慎御沙汰奉待候。右之趣、宜御奏聞之義、伏而懇願候。誠恐敬白。

辰ノ二月

という内容であり、別に「会津侯歎願書 但、在府大藩向へ差出候」として以下のような家老連署の文章が伝えられている。条理を尽くして、論を立てる手法は、いずれも悌次郎が草稿を起草し、家老座合議に付されたものと思われる。

謹而言上仕候。老寡君容保義、去戊午京都守護職被命候処、弊邑之義は東奥之藩鎮、且帝都を離る事二百余里、応援奉響之道も無覚束、力ヲ計、分を計る、其任ニ勝ざらん事を恐れ辞退申候得共、其節之御事体御艱難、皇国之安危ニ拘候御場合故、強而可相勤旨被命候ニ付、數百年來之隆国奉報度闔藩訊儀、京都を以墳墓之地と心得罷登、大樹尊王之趣意致遵奉、周旋奉職仕候。

然処不凶も蒙先帝被限之藏春御賞誉之宸翰を下し賜、其外度々御宸筆被下置、恩賜之品々も幾度となく拝戴仕候。

元來容保義、誠実一片ニ励精致、毛髮も私意無御座候ニ付、先朝以來格別之御依願を蒙り、大病之折は勿体無くも至尊之御身を以、内侍所御祈禱被遊候。

君臣水魚之情態、宸翰之表も御頭し被下、当朝ニ至り而も、先帝以來叡慮遵奉、守護職掌相助候訳を以、叡感思召被下、參議被推任、前後天恩之難有、主従感戴従例罷在候。随而大樹よりも度々之褒賞有之、彼是重々之隆恩闔国肝胆ニ銘ジ、冥加至極難有奉存候。前件之通両朝歴然たる厚眷、容保之誠実前後相替候儀、分寸も無之候。

然ニ伏見戦争之儀は徳川内府上洛先供、一同登京之途中、発砲被致、武門之習不得止忠兵、及一戦之儀ニ而、敢而闕下を犯候義等毛頭無之、之万人所其(知)前ニ御座候。

然ルニ於今日、不計も不慮之汚名を蒙り候段、臣子之至情日夜慟哭、不雪君冤、死とも不止と、闔国訳を以罷居、頑固之習風何共撫諭之道無之、於私共至々極々共心得候間、此上は寸時も早く雲霧快晴、一藩之人民安堵仕候様、幾重にも奉懇願候。

別紙、宸翰之儀は、先帝深意被為入、被下置候儀故、深筐府(笥)ニ藏置候得共、国事危急之今日ニ差迫候ニ付、御内々奉入御覽候間、此段御垂憐被成、乍恐御奏聞之義、伏而奉懇願候。恐懼敬白。

松平若狭守家老

慶応四辰年

二月

田中土佐
神保内藏助
梶原平馬

上田学大輔

内藤介右衛門

諏訪伊助

宸翰之写

張紙孝明天皇より肥後守へ賜候宸翰之写

堂上以下疎暴論不止之所置増長ニ付、痛心難堪下内命之所、速ニ領掌、憂患掃穢、朕存念貫徹之段、全其方忠誠、深感悦之余、右壺箱遣之者也。

文久三癸亥年十月十九日

張紙右御箱御詠之写

たやすからざる世に武士の忠誠のこゝろをよるこ

びてよめる

和らぐもたけき心も相生のまつの

落葉のあらず栄へむ

武士とこゝろあはしていはほをも

つらぬきてまし世々の思ひて

(『藤岡屋日記』)

注目されるのは、家老たちの歎願書末尾に、孝明天皇から容保に宛てて出された宸翰の写しが付けられていることである。会津藩の道理はこの歎願書に尽くされている。彼らが誠実に職務を遂行してきたことに間違いは無い。前天皇の信頼が如何に厚かったかとも誰もが知っている。だがこの道理は、「義拳賦り」と称してわざと事を構えて権力を握った新政府のメンバーにとっては取るに足りない泣き言にしか見えない。しかし京都から遠かった関東以北の大名たちに取っては事情

が違った。東北諸藩にとつては会津藩の救解が、最大の問題となつてくる。ひたすら謹慎を貫く慶喜は、十二日には江戸城を出て上野寛永寺の塔頭大慈院に移るが、攻撃態勢を整えて進攻してくる新政府軍に対して旧幕府関係者は否応なく臨戦態勢で対抗せざるを得なくなつていった。十三日、会津藩は穩健派の神保修理に切腹を命じた。さらに十五日、容保は片倉門内の馬場において、鳥羽伏見で戦つた藩士、洋式訓練を受けている藩士を召見して、東帰を反省し、家督を喜徳に譲り、家運回復を期すと宣言した。徹底抗戦という藩内の意思がここにも現れている。

二月二十一日、征東軍総裁有栖川宮熾仁親王が、名古屋に到着した。ちよつどの頃長岡藩の河井継之助が江戸藩邸に戻つた。彼は東北諸藩の藩士と連絡を取り、大榎屋において対応策を探る会議を開いた。この会議の雰囲気伝える証言が、『河井継之助伝』（今泉鐸次郎著）に記されている。証言者は秋月悌次郎と南摩羽峯、彼ら二人は会津藩関係者としてこの会議に出席していたもので、今泉は、伝を起草するにあつて秋月、南摩両人に事情を問い合わせたのである。

会津藩の秋月草軒曰く『河合君之還江戸也。余与桑名唐津及東北諸藩士。会議于大榎屋。君曰事至此。不若拒王師箱根。意気甚激昂。衆議不決。君曰。然則我藩独守封疆而已。乃辞去。』南摩羽峯も亦同会議に与りしが、著者に復書して曰、『大榎屋会議の件、今日に至りては、模糊として不分明に候得共、戊辰三月初めの様に覚え申候。何藩の發議にて会集の事に相成候哉、記憶不知候得共、長岡、会津両藩等主なる事と存候。議事も確と覚え不申候。大意は、朝廷へ十分歎願致し、それとも御許容無之時は、天朝の真意にあらず、薩長等諸藩の壅蔽し、聖聴を蔽ふこと顯然たり、然るときは十分相抗し可然との佐幕論に有之様覚え申候、其刻河

井君、最も慷慨激論せられたりと覚え候云々』。

二人の証言によれば、会議を招集したのは長岡、会津を中心に桑名、唐津を加えた東北諸藩、新政府の征討令に対してどう対応するかを議論した。河井は、征討軍を箱根で防ぐと激していたが、議論はけつきよくまとまらなかつた。秋月の証言では、この時河合は、そういうことなら、我が藩単独で国境を守るといつて出て行つたとあり、南摩の証言でも佐幕論が中心だつた、河合が最も慷慨激論したとある。

一触即発の事態が続く中、江戸詰め会津藩士は、国元に退去し始める。二月二十七日には、悌次郎が神尾鉄之丞と共に小栗忠順を訪ね、暇乞いをしたという記録が残っている。（『小栗日記』）

以後、甲府城攻防戦、上野戦争と、慶喜の意向に背いた一部旧幕府勢力と新政府軍との戦闘が始まるが、本稿の目的は、この時期の秋月悌次郎の動向を明らかにすることにあり、戦争の経過を論じることではないので、以後は会津藩と悌次郎の動きを中心に記述をすすめることにする。

九

三月九日、前備前松山藩主板倉勝静は、江戸を退去して日光へ向かつたが、藩士達は危機に備えて、問題が起きた際は直接会津に向かいたいと、会津藩に申し入れがあつた。この時會津藩で対応したのは手代木直右衛門、神尾鉄之丞、秋月貞次郎、広沢富吉（次）郎等京都守護職以来の公用局のメンバーであつた。（辻忠貞『艱難実録』）

三月十日、会津藩は軍制を改革した。有名な、朱雀、青龍、玄武、白虎の各組を組織したのである。

一方京都の新政府は、三月十四日、五箇条のご誓文を公布して、新体制への歩みを始める。

三月十五日悌次郎は、藩の軍事編成の一環として現在の役職のまま越後の新領勤務を命じられ、翌日幌役に任命された。丸山一族大系図

中、悌次郎の項には、「三月十五日、当務のまま越後御新領詰め仰せ付けられ同十六日、幌役兼務仰せ付けられ、席は金川奉行の上に成され候事。」とある。越後の新領とは、この年一月二十一日、幕府から会津藩預かり地とされた、蒲原、魚沼両郡にわたる十一万三千石の土地のことで、この時から悌次郎は、会津藩中枢の軍議から外れることになった。

彼は、会津藩の越後方面の本営が置かれていた水原に赴き、そこで長岡など越後地域との連携を密にして事態の打開を図った。

四月十一日、江戸城が開城し、旧幕府の中心は消滅した。この時慶喜は水戸に退隠、東帰以来の非戦、無抵抗主義を貫いている。慶喜が朝敵であるというフィクションをもとに始められた朝廷軍の東征は、大義名分を失い、以後は専ら会津藩を中心とする抵抗勢力の撲滅、一掃に力を注ぐことになる。

世情不安が深まる中で、四月二十六日、会津藩家老西郷蔵之進と自称する人物が、村松領庭月村で金子借用を申し出るが偽名と判明して捕らえられるという事件が発生した。村松藩は、越後国蒲原郡のうち、村松・下田・七谷・見附地方を支配した藩で、藩庁は村松城（現在の新潟県五泉市）にあった。村松藩はすくさま水原の会津藩本営に連絡、翌二十七日悌次郎は村松城下に行つて、本人尋問をしてその偽名であることを明言している。（『坪井静作日記』）

水原では、交戦準備のためさまざま打ち合わせがなされた。閏四月二十五日六つ半頃、村松藩土坪井静作が水原に来て、秋月悌次郎、萱野安之助等と面会しようとしたが、不在だったため、柴守三が対応しているし、閏四月二十八日に悌次郎は、水原にやってきた村松藩土稲毛源之右衛門らと面会している。（『坪井静作日記』）

こうした動きの中で、奥州各藩は、会津の救援のため、五月三日、奥羽二十五藩は仙台で同盟を結び、次いで会津・庄内・長岡など八藩

もこれに参加して、いわゆる奥羽越列藩同盟が成立した。

奥羽越同盟の結果、会津藩は白河口、仙台藩は磐城口、庄内藩は秋田をそれぞれまもることとなり、越後方面には米沢藩が当たることになった。『会津戊辰戦争史』によれば、五月十七日、中条長門を総督とし重臣色部長門、参謀甘粕備後らに率いられた米沢藩兵が水原に着した。（『甘粕備後日記・新潟県史資料』によれば、十六日。）甘粕の日記には、

五月十六日、中条豊前、笹岡より兵を水原に進め宿陣す、会津清水作左衛門・秋月悌二郎等来て、海手弥彦の切迫を告げ、応援を乞ふ、蓋し弥彦峠潰破れんとする勢に付、新潟表の二百人を繰出す二付、その後塞として新潟兵百人ヲ借し呉よとの懇願、中条、高山と議して諾之、

とある。秋月等は、水原の米沢藩の宿営に赴いて海手弥彦の戦況が切迫しており、二百名を派遣するため後備として新潟兵百名を出してほしいといい、それが叶えられたというのである。だが救援空しく長岡城は十九日落城、この時河井継之助は負傷して討ち死にを覚悟したが、たまたま居合わせた秋月等の説得により一瀬要人と共に栃尾に退いた。

五月二十二日、会津と米沢の将兵が加茂（現新潟県加茂市）に入り、会津の本営において、米沢の諸将、桑名の諸将、長岡藩の河井継之助等は、会津藩総督一瀬要人、軍事奉行西郷刑部、同副役秋月悌次郎、同柳田新助らと軍議をこらし、以後列藩の諸将は、日々相会して謀議することに決めた。

五月廿六日頃会津藩は、あらためて越後の政事方と軍事方を定めており、水原詰の中に、聞番秋月悌次郎の名があがっている。（『美々袋』『河井継之助伝』に、悌次郎が萱野権兵衛らと共に河井家を訪れて家

族から酒食のもてなしを受けたが継之助は帰宅しなかつたとあるのは、この頃のことであろう。

十一

水原詰め頃の悌次郎の動静ははっきりしない。唯一残されているのが『鎮西余響』の「秋月先生略伝」の記事である。

三月先生幌役に任じ、越後の水原に赴く。ここは会兵の本営所在地なり。五月に至り急報有り、長岡藩に至る。時に会兵は、諸藩の兵と共に多く越後の上流にありて、西兵の来路を遮断し、かつ戦い、かつ守る。西兵すなわち窃かに越後に下り、突如来たりて長岡の彼岸において砲撃す。会津兵僅かによくこれに砲撃す。先生また属員をしてこれを助けしむ。薄暮に至りて罷む。既にして暁を破つて市間大呼、火揚がると。またしきりに砲声を聞く。先生綿屋坊に馳せ至る。西軍既に河を涉つて来襲し、銃弾雨と下る。桑名兵わずかによくこれに砲撃す。先生と属員また之を援く。しこうして支うべからず。すなわち退きてまさに城に入らんとす。会藩弾薬奉行篠田兵庫まさに弾薬を駄してここを去らんとす。すなわち兵庫に告げて曰く、長岡藩兵は老少のみ。寡兵のみ。事すでに急、余は一人なりといえどもここにこれを棄てて去るに忍びんや。願わくば弾薬数駄を分けよと。すなわちこれを城内に輸せしめ、先生城中に入る。先生入城中、総督河井秋義藩老とまさに攻守の策を議す。先生曰く、今この烏合・老少の寡兵をもつて、内に藩公を護り外に守城を謀るは、極わめて難し。しかじ、とく藩侯をして会津に入らしめ、おもむるに守城を議せんには、と。秋義曰く、好し、と。また曰く、願わくば先生神田口門一方面を管理せよと。すでに神田口に至る。西軍城外に蝟集し、囲を攻むること甚だ急なり。会津藩老一瀬某の手兵二十人ばかり、村松藩物頭の部卒また二十余人、上山藩兵十余人、僅かにこれに砲撃す。

既にして神田口の戌兵来たり呼びて曰く、河井総督まさに進んで戦わんとす。諸君これを援けよ、と。先生至りこれを見るに、皆老少のみ。この頃秋義来りて曰く、ああ終われり。わが藩兵一戦する能わず。ここにいたる、また惜しむべからざらんや、と。まさにこの時、ほとんど三面皆敵にして、陸続環攻、また支うべからず。敵人あるいは一方より入城するも、また禁ずる能わず。先生曰く、戦地は独りこのみならず。一時ここを去るは如何、と。すなわち共に城を出でて栃尾に向かう。秋義途中先生等に告げて曰く、先に城を火とせん。君等先に去れ、と。栃尾の麓にいたり、本城を回顧すれば火まさに揚がる。遂に栃尾を躑えて加茂に至る。時に五月二十日なり。米沢、村松の藩士来たり会し、秋義また後に来たる。すなわち進取の策を議し、先ず長岡を復さんことを決す。先生主務あるをもつてまた水原に還る。これより後、長岡方面極めて烈戦、それ長岡を争うをもつてなり。先生七月をもつて新潟地方を巡視す。一朝海上に軍艦を見る。これ西軍なりと言ひ、あるいは榎本等来たるなりと言ふ、既にしてこれを諦視するに、西軍の汽船なり。先生謂う、直ちに沼垂松崎に至り上陸、新発田城に拠りて長駆、事まさに測るべからざらんとす。すなわち船を飛して水原に還り、事の由を告げ、すみやかにこれに備う。また輿を急がせて会津に赴く。赤谷関に至るに、天まさに暁、戌兵に報ずるに事の急をもつてし、若松に至る時正に初夜なり。藩老梶原兵馬を訪ね、告ぐるに目下の状況をもつてし、明るる日登城して藩公に謁し、越地の彼我の大勢、もつて備えざるべからざるを告ぐ。実に七月二十八日なり。復た越後に赴き津川に至る。西軍両道に進入し、互いに勝敗有り。この辺の山河は天険、敵鋒鋭しといえども、容易に入り難し。故に相持ちの勢い有り。ここにおいて佐川官兵衛先生に告げて曰く、ここは若松を去ること十四里

強、いわんや揚川有り、大川有り。敵なお遠し。猪苗代疆界は若松を距たること近し。あらかじめ戒めざるべからず。君けだし余と共に若松に至れ、と。先生曰く、好し、と。すなわち若松に帰り、まさに計画する所有らんとす。城中の議、先生等の猪苗代方面に至るを欲せず。すなわち常に城中に在り。八月二十二日午前、官兵衛復た先生に告げて曰く、事既に迫れり。共に猪苗代、江戸両道の兵備を巡視せんと。この時精兵四彊に在り、ほとんど内虚の勢なり。また如何ともする莫し。二十三日晝杳掛において食し、赤井村に赴く。まさに猪苗代地方、頻りに砲声を聞く。佇立することこれ久し。既にして敗兵三五騎来たる。すなわち相率いて背炙嶺に登り、若松城下を望めば、全面皆火、然りといえども城樹森鬱にして、城焚くるや否やを的知する能わず。苦慮甚だし。すなわち一行城南三丸より本城に入る。藩公自若として指揮すること平日のごとし。衆皆能く守禦す。これより先生常に藩侯に従い城中に在り。是より先四面攻囲累旬、その八月に至り、攻撃益々急にして、環城皆敵なり。これより攻戦数十昼夜連く。先生少しも屈せず。常に藩侯の左右に在り。副軍事奉行に任ず。既にして圍城を出でて、陣将萱野長修に属し、高久村の支営に在り。米沢藩主の専价(特使)露布短簡を齎して至り、謂はく、我が敵視して共に戦う所の者は、実に王師なり。今復た戦を辞する無し。すみやかに降るに如かず、と。先生入りて藩侯に稟す。藩侯すなわち、人を同盟各藩に遣してこれを謀る。先生と手代木勝任、再度米沢に至りて議し、九月二十三日すなわち降儀を了る。圍中の群臣先生と共に猪苗代に屏居す。(原漢文。現代仮名遣いにより読み下した。)

や、
ここに見られる長岡城の攻防戦における河井継之助とのやりとり
西軍の軍艦が新潟港に表れたときの対応策、その後の会津若松城

攻防戦における戦法などには、従来あまり知られていなかった悌次郎の働きが具体的に記されていて興味深い。後年の記事であるが、悌次郎の動静を考える上で注意すべきであろう。上杉侯の来翰は、悌次郎を一気に会津藩の運命を左右する事態の主役に押し上げることになった。

(この項続く)

二〇一八年十一月十四日

付記 前橋「秋月悌次郎の公用局復帰」中、「秋月先生略伝」の筆者笠間益三を学生としているが、笠間は五高教授で、秋月の同僚である。間違いをご指摘下さった小林修氏に心からお礼申し上げます、ここに謹んで訂正しておく。